

〔畜産農家の声〕 フォーベルネット会員

新見市 岡田 朋子

(備中県民局農畜産物生産課 畜産第2班)

新見市哲多町の荒戸山のふもとで、2008年11月に1組の親子牛を導入したのが始まりです。現在は、繁殖和牛を4頭飼養しています。牛飼いは私がしたくて始めました。うちの牛の飼い方には特徴があります。親子とも周年、昼夜放牧で、子牛生産と育成を行っていることです。ただ、牛を放牧することが好きで、これしか能がないということです。私はいい加減で面倒くさがり屋なので、きっちり牛を飼えないのです。だから、牛のことは牛に頼んでいます。ひとりごととして、今年の挑戦と5年後にありたい姿を書かせていただきます。

まず、昨年(2009年)の挑戦は、子牛の育成方法の確認でした。3頭の肥育素牛を育成し、子牛市場へ出荷しました。出荷したなかで、1頭目と、2、3頭目は、ほ乳期、離乳期、育成期の飼い方を変えました。1頭目は生まれて3ヶ月から4ヶ月までの親につけている時から、濃厚飼料(スターター)を積極的に給与しました。その後、牛舎で育成をしました。2、3頭目は、ほ乳期は濃厚飼料をあまり給与せず、母牛に任せ、離乳後も放牧をしながら育成しました。

そこで得られた感触では、放牧地で授乳中から積極的にスターターとチモシー乾草を十分に給与し、離乳後も放牧を続けながら、牛舎で飼う場合と同じ量の濃厚飼料と乾草を給与すれば、良い結果が得られました。今年生まれる子牛からその結果の確認を行い、確信がもてたら増頭しようと思います。

ただ、この飼い方で注意したいのが、

生まれたときの子牛の大きさです。新見で牛飼いを始めるまでは、10年間広島大学で肥育牛の成長を研究していました。手前味噌ですが、子牛の生時体重が肉牛として出荷する時の体重に影響があることが認められます。クローン牛といえども20kgで生まれた子牛と30kgで生まれた子牛では2年後の体重には100kgの差が出てきます。なので、大きく生まれた子牛と小さく生まれた子牛では濃厚飼料の給与量に微調整がいる気がします。

今年の挑戦は、共済をやめたことです。放牧がうまくいくと病気にもならないので、少しでも経費節約です。獣医さんのお世話にならなくても良いような、牛の飼い方を確立できたと思います。

5年後にありたい姿として、哲多町内にある荒戸山キャンプ場に牛を放牧していることです。私からするとほれぼれした雑草の状態です。早くそこに牛を5頭~10頭放したいと思っています。数年できれいなキャンプ場がよみがえり、人が集うところを復活させたいと思います。なにか、情報がありましたらお知らせください。

